

## ジョージア (グルジア) 便り その56 たまにはトビリシ観光でも

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ジョージアの国旗をご存知だろうか？

白地に5つの赤十字が入ったもので、いかにこの国がキリスト教と深い関わりを持っているかがよくわかる。人々は教会の前で立ち止まり十字を切つて一礼し、地下通路にはイコン画や蜜蝋が売られている。聖ニノの日や聖ギオルギの日といったジョージアの正教会の聖人にちなんだ日があつて、それらは国民の祝日だ。

いつもは祝日でも働くバレエ劇場も聖ニノの日は休みになった。新しいアパートに越してからゆつくりと外を散歩する機会もなかった。家の周りを探検してみることにした。夜劇場から暗闇の中帰宅するときに見慣れた街並みも昼間は別の顔をしている。19世紀に建てられた建物が多いこのエリアは、それぞれのフアサード<sup>※1</sup>がこの街の歴史を語っているようだ。男性の裸像が柱となつているもの、女性の裸像、崩れかけのモザイク、覆輪<sup>ふくりんめじ</sup>日地の化粧煉瓦、玄関のSALVE<sup>※2</sup>というラテン語、割れて雑草が生えてきている丸窓。ニコンのフィルムカメラを手に取ると、

過去の栄華が僕に気づいてくれよとフラインダーの中に入ってくる。

屋根が剥がれ、崩れかけの建物に佇むハスキーにフォークスを当てようとしたら、アラビア文字が目飛び込んできた。5ブロック先にある水タバコの店やレバノン料理屋の看板に書いてあるような雑なものではなく、洗練された洋館に見合うような美しい文字が立派な窓枠に施されていた。おそらくオスマン帝国の影響が強かった19世紀の名残であろう。イスラム教もトビリシに入ってきていたようだ。

キリスト教のオーソドックスな教会へと続く急な坂道を途中で曲がるとダビデの星の窓枠が他とは違うオーラをひっそりと放っている。車の多い大通りを一つ奥に入ったこの道は驚くほど静寂に包まれていて、カシエル<sup>※2</sup>と書かれたマーケットが連なる。道の名前が書かれた標識を探すとエルサレムストリートとあつた。キツパ(ユダヤ帽)を被った人々が入り出すところには立派なシナゴークがそびえ立っている。トビリシは一見するとキリスト教に大きく影響を受けた街のように見受け

られる。しかしベールを一枚めくり深く街に入り込めば、実は非常に国際色豊かな多宗教多文化の歴史を持っていることに気づく。

シルクロードを伝つてやってきた異教徒たちは寛大なトビリシの人々の温かさに居心地がよくなったのかもしれない。時代を超えてトビリシは人々を魅了するようだ。

※1…フアサードとは街路や広場などに面する建物の正面部。  
※2…カシエルはユダヤ教の戒律に従って処理された食品のことを指す。

### Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

